〔古事記下履中〕故其隼人飲時、大鋺覆面、爾取出置席下之劒、斬其隼人之頸、

〔古事記傳三十八〕席は牟斯呂と訓べし、書紀垂仁ノ卷、顯宗ノ卷、齊明ノ卷などに、シキ牟と訓たり、其も古言とは聞えたれど、書紀仁德ノ卷、歌に、椰須武志呂とあり、和名抄に、筵、和名無之呂、席訓上同、

〔日本書紀十一仁德〕四十年三月、○中略於是天皇聞隼別皇子逃走、卽遣吉備品遲部雄鯽播磨佐伯直阿俄能胡曰、追之所逮卽殺、○中略雄鯽等追之、至菟田追於素珥山、時隱草中僅得免、急走而越山、於是皇子歌曰、破始多氐能、佐餓始枳椰摩茂、和藝毛古等、赴馱利古喩例麼、椰須武志呂箇茂、

〔釋日本紀二十五和歌〕椰須武志呂固茂安席也、私記曰是安席也、

〔倭訓栞前編三十一〕むしろ○略中　歌に狹むしろ、藁むしろ、綾むしろ、苫むしろ、稻むしろ、菅むしろ、萱むしろなどよめり、細貫筵五綵筵、弘筵は江次第に見え、小町筵、食筵、龍鬚筵、廣席、狹席、東席、長席、出雲席、葛野席、黑山席は延喜式に見ゆ、黑山は河內丹比郡の鄕名也、ゐむしろは菌席也、かまむしろ越席也、くずむしろは葛席也、播磨筵は秘密筐に見ゆ、豐島筵は庭訓往來に見ゆ、小筵は雲圖抄に見ゆ、花筵は茵を染て織たる也、遲羅人の傳なりといへり、拾遺集に、ながむしろあり、續後拾遺に、からむしろ有、まさすけに、やまとむしろあり、又さしむしろあり、深緣指筵は四方緣のつきたる也、又伊勢班席あり、神鳳抄に端裏筵あり、類聚雜要に表筵あり、

〔松の落葉三〕むしろ

むしろはくさ〳〵あり、廣筵、長筵、狹筵、小筵は、そのかたちによりていひ、出雲筵、信濃筵、あづま筵は、おり出す國によりていひ、たかむしろ、菅むしろ、綾むしろは、去なによりていへり、又張筵といふあり、これは、とにはりて、塵のたち來るをふせぐものなり、西宮記四の卷、相撲のくだりに、三府佐著牀子給張筵云々、有飛塵者、主殿灑水掃除撤張筵とあり、又細貫筵といふもあり、江家次第一の卷、相撲召合の條に、敷滿廣筵幷細貫筵とあり、ほそくながき筵なめり、さてたゞ筵といへる中

筵種類